P05

歯の衛生週間イベントにおけるRDテストによるカリエスリスク調査

○ 小西郁理、近藤好夫、齋藤　幹、佐藤恭子、日高　聖、西口美由季、釜崎陽子、佐々木康成、星野倫範、細矢由美子、藤原　卓
長大院・医歯薬・小児歯

【緒言】
長崎大学小児歯科学分野では、歯の健康週間に長崎市歯科医師会が毎年主催する歯ッピースマイルフェスティバルに参加し、来場者に対する歯科啓蒙活動を行っている。
今回、今年6月に開催された歯ッピースマイルフェスティバル2009で、当分野のブースを訪れた1歳から11歳まで98人に対してう蝕活動性試験であるRDテストを行い、その結果と来場者の要因との関連性を分析したので報告する。
【方法】
イベントはJR長崎駅前のかもめ広場で日曜日に開催された。小児歯科ブースでは、「お口の健康検査」としてRDテスト（昭和）と、「歯のクイズ」として、PCを用いたクイズを行った。RDテストは、年齢、性別を聴取後、採取した唾液を浸透した試験片をパッチに貼って小児の前腕部に貼付し、１５分後に判定した。
【結果と考察】
来場時間は、高年齢は午前中に来場者が多く、低年齢は12時台に集中していた。RDテストの結果では、Highリスク群の占める割合が最も多いのは、1ー3歳群で、Lowリスク群の占める割合が最も多いのは9ー11歳群であった。男女比ではRDテストによるう蝕活動性の判定は男児よりも女児で高い傾向がみられた。来場時間とRDテストの結果から、12時代は最も人出が最も多く、来場者も歯ッピイスマイルフェスティバルが目的ではなく、たまたま通りがかった来場者が数多くいたと考えられた。10時台、14時台の来場者は歯の健康検査を目的としていることが推定されるが、12時台の来場者のようにこのように歯科への関心が薄い集団に対して、今後どのように啓蒙活動を行っていけばよいかが課題と考えられる。

P06

デンタル・ヘルス・リテラシーの向上を目指した学校歯科保健指導の試み

○新生育子
久木野歯科診療所（熊本県）

【目的】誤った認識の歯磨き行為を長期間、無自覚に続けたことが原因の歯科疾患は多い。「漫然とではなく、しっかり理解し意識して行う歯磨き習慣の確立」は、これからの歯科健康教育の課題の一つと思う。学童期は生活習慣の確立期と言われる。そこで学校で行う歯科保健教育を、学年毎に有機的発展的に計画し、「自己健康管理の大事な一つとして歯磨き生活習慣を捉え、歯磨きを実行する子ども達の育成」を目指したある実践を紹介する。
【方法】郡部にある某小・中学校の学校歯科医の私は、ある時歯科保健授業の一部を担当する機会を与えられ、それを契機に以後、学校歯科医による歯科保健授業が継続されることになった。歯科医による授業の対象は、小学校１年生から中学校３年生までの計９学年で、年に１時限ずつ（中学３年のみ２時限）の授業である。授業内容は「私たちは何故歯みがきをしなければならないのか」をテーマとして、数次にわたる改善を繰り返し、十余年かけて当地区独自の学校歯科保健カリキュラムが整うに至った。これにより当学校区の小学校１年生から中学校３年生は、積み重ね（段階的発展的）学習形式で９年間の歯科保健健康教育を受けることになった。
【結果】当地区小中学校では、学校歯科医による授業を、日常的な歯科保健活動の中心に据えて、日々の指導に活用している。う蝕罹患率・歯肉炎率を学校歯科検診結果から眺めると、ここ数年来明らかな右肩下がりの減少傾向で、保健指導の効果が示唆されていた。
【考察】以上は一例であるが、ヘルスプロモーションの概念が提唱され、「生きる力を育む教育」が謳われる現在、歯科保健指導教育においても、現状に合わせたさらなるステップアップが求められていると思うのである。